

中学生・高校生における抑うつの臨床心理学的理解と援助

山口, 祐子

<https://hdl.handle.net/2324/1441014>

出版情報：九州大学, 2013, 博士 (心理学), 課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開 (2)

氏 名 : 山口 祐子

論文題名 : 中学生・高校生における抑うつの特徴の臨床心理学的理解と援助

区 分 : 甲

論 文 内 容 の 要 旨

本研究は、①中学生・高校生の抑うつの特徴を明らかにすること、②中学生・高校生の抑うつへの援助のあり方を検討することを目的として行われた。

第1章では、中学生・高校生はアイデンティティの確立、親からの心理的離乳、新しい人間関係の構築といった課題に立ち向かう時期であり、抑うつを示すことが多いこと、発達課題と抑うつとの研究は多くなされているが、中学生・高校生の抑うつを成長発達を促す肯定的な要因として捉えた研究は少ないことを挙げた。そのため、①高校生においては抑うつの特徴などを全体的に把握した上で、②抑うつの特徴を考慮した検討を行い、近年の高校生の抑うつの特徴を把握すること、③中学生においては援助につながる分類を行い、中学生の抑うつへの教師の認識を明らかにすることが必要であると考えられた。また、中学生・高校生の抑うつへの援助の課題として、①抑うつを示す中学生・高校生の日常生活の様子を把握すること、②うつ病の中学生・高校生の事例における回復プロセスを検討することが必要と考えられた。

第2章から第4章では中学生・高校生の抑うつについて質問紙による調査を行い、その特徴を検討した。

第2章では、ある地域の全高校5校の全学年の高校生を対象に1999年～2001年の3年間の縦断的調査を行い、高校生の抑うつの特徴を検討した。その結果、①高校生の30%に抑うつを示す生徒が存在すること、②小中学生と比べ、身体症状が乏しいこと、③DSRS-C得点が16点～18点の生徒は抑うつが変動しやすく、19点以上の生徒は抑うつを継続しやすいこと、④高校生の抑うつ感は持続しにくいこと、⑤一方で、高い抑うつ感が持続する生徒は孤独感や自殺念慮が継続しやすいことが明らかとなった。①③④については、この時期の発達課題に向かい合う際、抑うつが表現されやすいと考えられた。②については、内面を言語化することが可能となる時期であることによると考えられた。⑤については支援を要する生徒は孤独感や自殺念慮を示しやすいと考えられた。

第3章では、2000年に調査した高校5校で2010年に再度調査を実施した結果より、2000年と2010年における高校生の抑うつを比較し、その変化を検討した。その結果から、①抑うつ総得点の変化はみられず、抑うつを示す子どもが増えているという指摘に慎重になる必要があること、②抑うつを示す生徒において、『楽しみの減退』の減少と『抑うつ・悲哀感』の増加がみられ、青年の対人関係の取り方の特徴との関連があること、③近年、身体症状を示す生徒が増えており、高校生の未熟化との関連があること、④高校2年生において「生きていても仕方がない」が増加していることから、高校2年生は先が見えにくい状態にいると考えられること、⑤高校2年生における「生きていても仕方がない」は家族との関わりや達成感と関連があることを考察した。

第4章では、中学校2校において調査を行い、DSRS-C得点がCut-off point=16点以上の生徒を不登校、身体症状、社会的スキルにより類型化した。そして各類型と抑うつとの関連、および教師の認識を検討した。その結果、「高スキル・適応群」「低スキル・非表現群」「不適応顕在型・低スキ

ル群」「不適応反応群」の4群が得られ、類型と抑うつとの関連では「不適応顕在型・低スキル群」、
「不適応反応群」は「高スキル・適応群」、「低スキル・非表現群」に比べ、抑うつが高かった。各
類型についての教師の認識として「高スキル・適応群」「低スキル・非表現群」では生徒の抑うつが
対人関係の再構築に伴うこと、「不適応顕在型・低スキル群」では社会的スキルの低い生徒には自
分の状態を上手に伝えることが困難な生徒と引っ込み思案な生徒が存在し、不適応状態が教師の認
識を高め、周囲がサポートしやすい状況であること、「不適応反応群」では抑うつを示すことで自分
のペースを把握し、教師との関係を再構築すると考えられることを考察した。

第5章、第6章では、第2～4章にて得られた知見をもとに行った臨床心理学的援助について検
討した。

第5章では、第4章での調査をもとに教師に対する援助として実施したフィードバック面接につ
いて、中学生の抑うつの類型ごとに、生徒の日常生活を把握するとともに、スクールカウンセラー
によるコンサルテーションがどのような方向性をもつべきか検討した。その結果、抑うつの類型に
よる日常生活の把握として、①「高スキル・適応群」には対人関係が良好である生徒、②「低スキ
ル・非表現群」には周囲からの評価が気になる生徒、③「不適応顕在型・低スキル群」には対人関
係が苦手な生徒と気を遣い人気がある生徒が存在し、これらの生徒に対し教師は日記を媒介とした
関わりなどを行うこと、④「不適応反応群」には対人関係がフィードバック面接前には不良であつ
たが、改善傾向にある生徒が存在し、学校全体での取り組みに加え、家庭との連携の充実などの取
り組みを行うことが明らかとなった。コンサルテーションの方向性としては、①「高スキル・適応
群」では発達課題に向き合い日常生活は支障なく送ることができ、過去の対人関係を修正するにあ
たり抑うつを示すこと、②「低スキル・非表現群」では対人関係の距離をはかるための親との間で
行われる依存と自立の往来に伴い抑うつを示すこと、③「不適応顕在型・低スキル群」では教師が
生徒に真剣に向き合うことが生徒と教師双方の成長を促す作用があること、④「不適応反応群」で
は生徒が自分のペースを把握することがアイデンティティの確立につながることや、教師が学校全
体での取り組みを行うことが重要であることをフィードバックする必要があると考えられた。

第6章では過剰適応的なうつ病高校生の事例を検討した。その結果から、自己の同一性の確立と
他者との関係での達成感の獲得が自己と他者との関係における適応につながることを示し、そのプ
ロセスとして<準備段階><試行段階><実践段階>を提示した。<準備段階>では自己連続性の
確立のため、セラピストは一貫した態度を示すことを心がけた。<試行段階>では家族関係の捉え
直しと『犬の世話』を巡る達成感の獲得のため、セラピストは犬の成長とクライアントの成長を重
ね、犬の世話を通じて得られた達成感について確認した。<実践段階>では対人場面での心理社会
的同一性の確立と学校生活の中での対人関係における自分と相手の気持ちに焦点を当て面接を進め、
次第に対人関係での達成感を得、孤独感が軽減し、抑うつ感も消失した。この3段階を経ることで、
対人関係で無理をせずに周囲の人に合わせる関わりが可能になると考えられた。

総合考察として、第7章では、第2章から第6章の結果をふまえて、一過性の抑うつを示しやす
い生徒(DSRS-C=16～18点)、高い抑うつが継続しやすい生徒(DSRS-C=19点以上)の特徴と臨
床心理士による臨床的援助について述べた。

第8章では、総括を行うとともに今後の課題を述べた。今後の課題として、①生徒を取り巻く学校
の状況との関連(第2章)、②自殺念慮の検討(第3章)、③スクールカウンセラーによる生徒の面
接の必要性(第4章)、④教師によるフィードバック面接の受け止め方(第5章)、⑤スクールカウ
ンセラーと医療の連携のあり方(第6章)を挙げた。このような検討を行うことによって、一過性
の抑うつと継続する抑うつを示す生徒へのスクールカウンセラーや医療における臨床心理士の関わり
が、今後さらに明確になると考えられた。